

## 第35回福島県精神医学会学術大会 抄録

日時：2024年（令和6年）2月4日（日）9:30～13:00

場所：福島県立医科大学7号館2F大会議室

### セッション1：震災関連

#### 1. 福島原発事故後に発症しタッピングによる潜在意識下人格の統合法（USPT）により人格の融合をし得た部分的解離性同一性症の一例

<sup>1)</sup>福島県立医科大学医学部神経精神医学講座

<sup>2)</sup>福島県立ふくしま医療センターこころの杜

○本間（照井）稔宏<sup>1)</sup>，井上 祐紀<sup>1,2)</sup>

大成 晃<sup>1,2)</sup>，橘高 一<sup>1,2)</sup>

Unification of Subconscious Personalities by Tapping Therapy：USPTは、2007年に小栗により考案されまとめられた解離性障害の心理療法の一つである。主に解離性同一性症やそれに準ずる内在性解離において、膝や肩のタッピングを行うことにより、区画化された人格部分が担当した心的外傷を処理し、人格の統合的単一化を目指す技法である。比較的短い治療期間の中で、体系化された安定感のある方法で処理を進めていくため、クライアントはもとよりセラピストが、パーツに対して心理的障壁をさほど感ぜずアクセスすることができる技法であると思われる。

東日本大震災（以下、震災）およびそれに伴う福島第一原子力発電所事故（以下、原発事故）の被災による福島県民のメンタルヘルスへの負の影響は成人に留まらず、子どもの情緒や行動にも及んだ。震災から10年以上を経て、子どものメンタルヘルス、特にトラウマ関連障害の問題は長期化・難治化するケースが想定以上に多いことが懸念されている。

今回我々は、原発事故に伴う県外避難後、およびその後の県内への帰還後のそれぞれの時点で虐め被害を受けて発症した部分的解離性同一性症を経験した。さらに、母親の協力を得ながらUSPTを行うことによって、主人格と交代人格との融合を達成することができた。被災地の治療者自らが意識して探索する必要がある震災関連のトラウマを、当時の被害の肩代わりを担った正にその人格への労いを以て治療することができた貴重な事例であり、被災地での診療にあたっての心構えおよび治療技法、両者の啓発的意義を込めて報告したい。

なお、本報告にあたり匿名性や個人情報保護に十分に配慮し、本人に口頭および書面にて報告の同意を得た。

#### 2. 東日本大震災後 PTSD からアルコール依存症を発症しコロナ禍後意識障害の遷延に至った一例

<sup>1)</sup>福島県立医科大学医学部神経精神医学講座

○東城 愛美<sup>1)</sup>，佐藤亜希子<sup>1)</sup>，小野 広夢<sup>1)</sup>

鈴木 悠平<sup>1)</sup>，矢戸 理紗<sup>1)</sup>，赤間 孝洋<sup>1)</sup>

野崎 途也<sup>1)</sup>，三浦 至<sup>1)</sup>

アルコール依存症の発症には様々な要因が関与するが、不眠や心的外傷後ストレス障害（PTSD）といった精神疾患を持つ人は自己治療としてアルコールを利用し、依存症の形成に繋がることもある。また、災害後にアルコール関連問題が増加する可能性が高いという報告もある。さらに、新型コロナウイルス（COVID-19）感染症のパンデミックにより生じた分断・孤独といった環境変化は人々の飲酒行動を変え、国際的にコロナ禍での飲酒量増加、飲酒問題悪化が問題となり、WHOから飲酒に関して勧告も示された。日本では総アルコール消費量は減少したものの、アルコール性肝障害、膵炎入院患者が1.2倍に増加したという報告や、アルコール依存症患者の18%がコロナ禍で飲酒欲求が増強したという報告もあり、一部の集団では飲酒問題が悪化した可能性が考えられた。その他COVID-19罹患による肝疾患重症化も指摘されている。今回、東日本大震災後、アルコール依存症を発症し、コロナ禍後にアルコール性肝障害の増悪と飲酒行動の悪化を認め意識障害に至った一例を経験した。

症例は50歳男性。東日本大震災翌日、多数の児童の遺体が散乱する場面を見てから入眠できなくなり飲酒量が増加した。X年5月、COVID-19感染後に浮腫、肝酵素上昇を認めA病院でアルコール性肝障害、肝腫瘍と診断された。経過からアルコール依存症が疑われ、同年8月当科を初診。アルコール依存症、PTSDと診断され薬剤調整目的に同年9月に入院。しかし退院後、大量飲酒が続き同年10月意識障害を認めたため精査加療目的に当科に医療保護入院となった。本会では、症例をもとにアルコール依存症と災害、コロナ禍の影響について、心理社会的・生物学的側面から文献的考察を行う。尚、本発表は本学の倫理規定に基づき、本人の同意を得てプライバシーに関する守秘義務を遵守し匿名性の保